

## 日中同時通訳における処理単位について

龐 焱 (Pang Yan)

(広東外語外貿大学東方言語文化学院日本語学部)

*Is it appropriate to divide sentences into phrase units when converting languages? This article argues this question basing on data of a Japanese-to-Chinese simultaneous interpreting corpus made by the author, through analyzing from grammatical difference of these two languages and time limit of simultaneous interpreting. At first, the author compares grammatical constructions between Japanese and Chinese by using data from the corpus, and analyzes the impact of word order difference on comprehension and production of simultaneous interpreting. Next, basing on the same corpus, the author analyzes why interpreters are impossible to wait for a whole sentence when working under time limit in cases of simultaneous interpreting, and argues that it is reasonable to divide sentences into phrase units when converting languages. The author concludes that interpreters should divide sentences into phrase units as to comprehend the source language.*

### 1. はじめに

Jääskeläinen, R. (1993) は、翻訳単位は、翻訳者にとっての翻訳中における注意力単位であり、翻訳者の“標識がない処理”行為が特定の任務と関連していない問題に転換することによって中断された話の段落と考えている。Lörscher (1993) は、翻訳単位は翻訳者がフォーカスしているソース・ランゲージのテキストであり、その目的は、ターゲット・ランゲージでそのテキストの内容を一つの総体として再生することであると指摘している。Gerloff (1986) は、翻訳単位は翻訳者の分析単位であり、音素、音節からテキストまで七層のものを含んでいるものだと考えている。Seguinot (1996:75-95) は、プロの翻訳者はいつも文を翻訳単位としていると同時に、文中の細部の問題にも目を注いでいる、しかし、文の全体の意味は細部の問題を解決しようとする時に参考にするものだと論じていた。

通訳の場合は、どうなっているのか。実際、通訳の処理単位を巡る議論は通訳学界の学者及び通訳者の間で長期間に渡って続いてきた研究課題の一つである。Seleskovitch, D. (1978) の“意味の理論”は、「通訳は言葉ではなく話し手の伝えよう

---

Pang Yan, “A study on the processing unit of Japanese-to-Chinese simultaneous interpreting”, *Interpreting and Translation Studies*, No.14, 2014, pages 171-182. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies.

とする意味を捉え、それを通訳者自身の言葉で表現するもの」という基本的理念を提示した。つまり、通訳は言葉を訳すものと考えられていたのに対して、意味を捕まえて、意味対等の通訳が求められていると提唱している。“意味の理論”によると、通訳の処理単位は言語レベルにおけるものではなく、テキストまたはディスコース・レベルでの意味対等的なものとなるべきだと思われる。

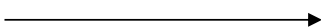
同時通訳、特に日中同時通訳は、よく長文を使うという日本語の特徴と日中語間の語順差に直面し、さらに、同時通訳による時間の制限という特殊性が避けようもない大きなプレッシャーとなっている。このような状況の中で、日中同時通訳は、語句単位に区切って言語変換していくことが合理的なのか、つまり、日中同時通訳における処理単位をどう捉えるべきかを小論では考えたい。

この小論では、筆者が作った日中同時通訳のコーパス<sup>1</sup>からデータを引き出し、日中语法構造の差異を比較しながら、この差異による日中語間の語順差が同時通訳における情報処理と訳出処理にどのような影響を与えるのかを分析してみる。それから、同じコーパスに基づいて、同時通訳の際、通訳者が限られた時間内に、話し手の意味が分かっている中で訳出処理が不可能になってしまう理由を分析し、話し手の話の理解の処理単位は文を語句単位に区切っていくしかないとの意見を述べてみたい。

## 2. 日中语法構造差異による日中語間の語順差

日本語は長文がよく使われ、しかも、文の重要な成分は文末に来るといような特徴がある（金田一 1988）。それ故、日中同時通訳になると、通訳者は往々文末まで待たないと、原発言の意味を捕まえることが出来ないし、正しく日本語を理解出来ないことよって、中国語で意味を訳出することも出来なくなる。具体的な文法構造から見ると、中国語は主に「主語＋述語＋目的語」であるが、日本語は、主語がよく省略されていて、主に「目的語＋述語」という構造となっている。このような大きな違いがあるからこそ、日本語から中国語への同時通訳において、情報処理と言葉の組み立て直しは非常に複雑になってしまう。

簡単に説明するため、図1を使って、日中语法差異による日中語間の語順差と同時通訳の情報処理プロセスとの矛盾関係を取り上げてみる。図1から、日中二ヶ国語の文法特徴と文法構造の差異による複雑性がはっきり分かる。

進行時間： 

SL<sup>2</sup>: 広 東 省 は、中 国 の 他 の 地 方 よ り も 遙 かに この 知 的 財 産 問 題 の

TL<sup>3</sup>:

(SL 語順を変えない文) 广东省, 比中国的其他地方相比, 知识产权问题的

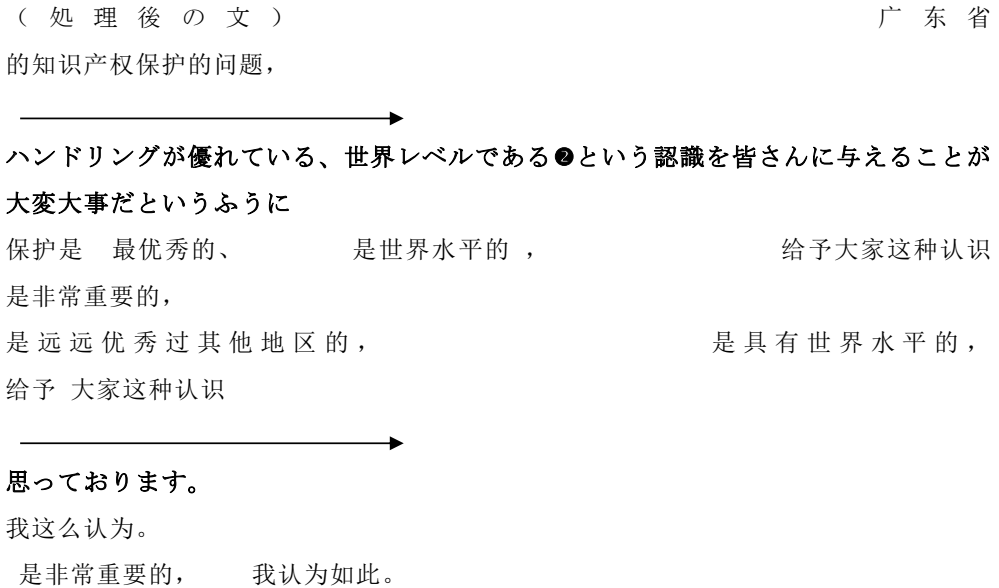


図1 日中同時通訳の情報処理プロセスと言葉を組み立て直す順番図

以上の図からよく分かるように、二ヶ国語の文法構造が違うため、通訳者は最後まで待たないと、話し手の意味を完全に理解することが、非常に難しい。

これとよく似通った現象は常に同時通訳作業の中に出てきている。筆者の作成したコーパス<sup>4</sup>の中からさらに以下のような文をランダムに抽出し、分析をした。

SL1: 従いましてこのブランドイメージを損なわないように❶、少なくとも、高い技術、世界レベルの高い技術を目指した目標を設定されるような施策を❷展開されたらどうかと❸。

(2005年広東経済発展国際諮問会より)

同時通訳者が文節ごとの意味を完全に聞き取れている状態で、SLの語順どおりに直接通訳する内容は、以下のようなになるはずである。

TL1 : ❶ 因此, 为了不损害这个品牌形象,  
 (従いまして、このブランドイメージを損なわないように)  
 ❷ 至少, 高技术, 以世界水平的高技术为目标的目标被设定,  
 (少なくとも、高い技術、世界レベルの高い技術を目指した目標を設定されるような)  
 ❸ 这样的政策被开展的话, 会怎么样呢……<sup>5</sup>

(このような施策を展開されたらどうか)

TL1 を整理すると、

TL2 : 因此, 为了不损害企业的品牌形象, 我建议广东省政府, 至少应该实施这样的政策, 比如说设定以世界水平的高技术为目标。

(従いまして、このブランドイメージを損なわないように、私が広東省政府に提案したいのは、少なくともこのような施策をするべきです、例えば、世界レベルの高い技術を目指す目標を設定されたらどうか)

SL1 と TL を分析して見よう。SL1 の主要成分である“施策を展開されたらどうか”は文末に来ていたため、通訳者が比較的纏まった意味を捕まえようとするなら、この文を最後まで聞き取る必要がある。しかし、TL1 は時間の制限を考慮した上で、①②③のように文節ごとに耳に流れ込んで来た語順に従い、理解し、訳出したものである。その結果は、TL1 の表現は乱れていて、意味も不完全である。その上に、より複雑なのは、SL1 の①と③の文節構造は、主要成分後置という構造となっているため、通訳者が聞き取りながら理解し訳出する困難さが一層大きくなるわけである。

実際には、このような主要成分後置の状況は同時通訳作業にどう影響しているのか、コーパスから三名の通訳者の訳文を抽出して、その文に対する処理結果を見てみよう。

通訳者 P<sup>6</sup> : 因此, 品牌形象, 为了要维持这个品牌形象①, 所以我们要向, 有相当高的, 在全球相当高的技术, 这个高水准的技术呃就是, 应该是我们的目标②。

(従いまして、ブランドイメージ、このブランドイメージを損なわないために①、我々がぜひ、相当高い、全世界で相当高い技術に向かうべき。この高いレベルの技術は、つまり、我々の目標であるべきだ②。)

通訳者 D : 要如何做到, 不毁损企业的品牌形象①, 并且去追求企业的利益, 必须要创造这样子的目标②, 才有办法做出一个真正的技术革新。

いかにして、企業のブランドイメージを損なわないのか①、また、企業の利益を求めるのか、このような目標を設定する必要があります②。そうすれば、本当の技術のイノベーションを実現できる。)

通訳者 A : 因此, (p) (3)<sup>7</sup> 为了不要损害企业形象①, 把目标放在世界, 世界级的技术②, 这是很重要的。

(従いまして、(p)(3)企業のイメージを損なわないように①、目標を世界レベルに置く事、つまり世界レベルの技術②、これはとても大事です。)

TL 文を分析してみると、

- (1) ①の前の文節内容は、三名の通訳者が全て正確に訳した。
- (2) ②の前の文節内容については、通訳者 P と通訳者 A は基本的に正確に訳したが、ただし、100%でないことは前後の文脈を合わせて見ると分かる。通訳者 D は SL 文と似通ったような表現があったにも係らず、意味が多少違っていた。
- (3) ②と③間に挟まれている文節の意味は、三名の通訳者が全部聞き漏らしている。通訳者 A が“这是很重要的。”という文を加えているが、しかし、この訳文に相当する内容は発言者の話の中に出てきていない、単に、通訳者個人が勝手に処理した結果と見られる。

以上の分析を通じて、一つ面白いことに気がついた。三名の通訳者は SL1 に対する処理の正確性が①②と③の順番でだんだん弱くなっていくことである。言い換えれば、①の前の内容に対して、三名の通訳者は皆正確に訳し、聞き漏らした②の前の内容に対して、二名の通訳者しか正しく訳せず、③の前の内容は三名の通訳者は皆聞き漏らしていることである。

また、日本語の文の主要構造が文末に来るという特徴は同時通訳時に、通訳者が正しく SL を理解する事を邪魔し、通訳の質に影響していると分かった。

しかし、また他の要素、例えば、話し手が喋っている話の前後の文脈は、SL1 の内容と関連しているのか、もし関連していたら、その関連性が通訳者の理解に何か影響をしているのかという点も考える必要があるだろう。

そこでコーパスの中から SL1 の前の文を抽出してみた。SL1 は、話し手の最後の総括発言であったため、後に続いている文はなかった。直前の文は以下のようになっている。

“例えば、自動車でいきますと、ええ、最後は、ええ、製品の、お、製品自体の、まあ、性能に加えて、一番最後重要になってくるのは、や、ブランドイメージだと思います。”

(比如，从汽车行业来说的话呢，最后的产品，再加上产品本身的性能，才是最重要的。)

この文を読むと、SL1 との前後の関連性があまりないと分かり、それゆえ通訳者の理解にも大きな影響がないと見られる。

コーパスからもう一つの例をランダムに抽出し、分析してみよう。

SL2: 従いまして、え、積極的に、技術移転を、してもらうためには①、広東省は、中国の他の地方よりも遙かにこの知的財産問題のハンドリングが

優れている、世界レベルである②という認識を皆さんに与える③ことが大変大事だというふうに思っております④。

(2009年広東経済発展国際諮問会より)

通訳者が情報の流れてきた順番に沿って、訳すと、

- TL1 : ① 因此，嗯，积极地，为了积极地让企业进行技术转移，  
(従いまして、ええと、積極的に、企業を積極的に技術移転をしてもらうために)  
② 广东省在知识产权问题上的运作都比中国其他地方要优秀，具有世界水平  
(広東省は知的所有権の問題のハンドリングが、中国の他のところより優れている、世界レベルである)  
③ 给大家这样一个印象  
(皆さんにこのような印象を与えるのは)  
④ 我认为这件事情是非常重要的  
(このことは非常に重要だと思います。)

以上の訳文を普通の表現に整理すると：

- TL1 因此，为了积极地让企业进行技术转移，我认为广东省要给大家一个这样的印象，就是广东省在知识产权问题上的运作都比中国其他地方要优秀，并且具有世界水平，这是非常重要的。  
(従いまして、積極的に企業に技術移転をしてもらうために、私が思うのは、皆さんにこのような印象を与えるべきです。つまり、広東省は知的所有権の問題のハンドリングは中国の他のところより、優れていること、そして、世界レベルであることです。これは非常に重要です。)

四名の通訳者はそれぞれ以下のように訳している。

- 通訳者 P: 因此能够积极地，为了能够积极地让外面的企业进行技术转移，①因此广东省必须要跟，比其他的地区都还要，诶，在智慧财产权的运作上面是符合国际标准的是，世，恩，比其他地方还要优秀的②，我需要，额，需要让恩，这些企业有这样的印象③。  
(従いまして、積極的に外の企業を技術移転をしてもらうため、①従いまして、広東省は、他の地方より、ええと、知的所有権のハンドリングの面では、国際基準に基づくべき、世、ええと、他のところより優れている②、私は、ええと、これらの企業にこのようなイメージを持たせたいです③。)

通訳者 D: 所以要让这些公司能够放心, 并积极地去来做技术转移①, 那广州地区就必须要去能够成为中国之中有世界等级的一个智慧财产保护的一个地区②, 要让大家有这样子的一个认识, ③这是非常重要的。④  
(従いまして、安心して、企業を積極的に技術移転をしてもらうために①、広州は、必ず、中国の中で、世界レベルの知的所有権保護の地区になるべきです②。皆様にこのような認識をしてもらうべきです③。これは非常に重要です④。)

通訳者 A: 为了促进更积极的技术转移, ①广东省(p)(2)是跟其他中国地区比较, (p)(4)智慧财产的保护观念非常的优异②, 要给大家这个形象③是很重要的④,  
(より積極的に技術移転をしてもらうために、①広東省は(p)(2)中国の他のところと比べて、(p)(4)知的所有権保護の観点が非常に優れている②、皆さんにこのような印象を持たせるのは③非常に重要です。)

通訳者 Y: 其实, 所以, 恩, 假如, 希望能积极地做, 恩, 智慧的一个技术转, 转移的话呢①, 你可能要有, 恩, 这个对于智慧财产是在中国其他地区都还高的, 是世界水平的②, 要这样的一个认知, 而给予, 恩 在场的各位③才是重点的④,  
(実は、従いまして、ええと、もし、積極的に、ええと、知的、技術移転をしてもらいたいなら①、あなたたちは、ええと、知的所有権は中国のほかの地区より高い、世界レベルであるべきだと②、ええとこのような認識、ご在席の皆様と与えるのは③、重要だと④。)

以上の SL の重要な情報を表す主要構造は基本的に文節の末に来ているため、通訳者が訳している内容は乱れているものが多く、完全な意味ではないと言うことが分かる。そして、訳文を通して、通訳者は、後ろに出てきた完全な意味を受け取る前に、訳文の表現にある程度の誤りがあることに気づき、纏まった意味を受け取ってから、初めて、誤りが有った表現を言い直していくことが分かった。

### 3. 同時通訳の時間制限の特殊性

日本語文は主要な成分が殆ど文末にくる、そして、長文がよく使われるから、同時通訳者が話し手の話全体を理解し、意味を組み立て直して中国語に訳出するのに、十分な時間はあるのだろうか。時間制限のプレッシャーは同時通訳者にどのような影響を与えるのだろうか。次はこの点について考えてみたい。

具体的なやり方は以下の通りである。コーパスを作成する段階で、話し手の発言の録音を聞きながら、話の語速を記録していく。語速を表す時間を同時に録音から書き換えたテキストに書き込む。語速の記録はすべて筆者自身で作業しているため、単に文の始まったところ、終わったところと文の中に 2 秒または 2 秒以上止まったところの時間を記録しただけである。最後に、これらの情報を図 2 の中に書き込んで、分析



をしていく。

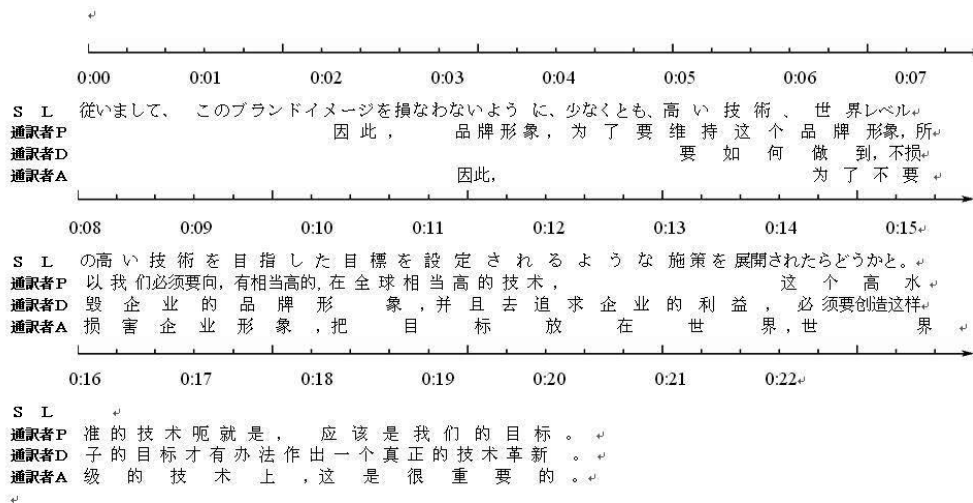


図2 各同時通訳者の通訳時間と通訳内容の比較図

図2を説明してみる。

まず、横軸は時間軸で、時間を表す目盛りを記している。一つの日盛りは1秒を指す。横軸の下に、SLとTLの文を入力している。各文の始まったところと終わったところを合わせた時間の目盛りは話し手（発言者と通訳者）が話を言い出した時間と言い終わった時間である。各SLとTLの最初の位置に、それぞれ話し手と通訳者を記している。

この図に基づき、順次、通訳者が情報を訳したスピードとSLの内容と比較し、分析してみる。その目的は、同時通訳の中で時間が通訳者にプレッシャーをかけるのか、かけるとしたら、どのような影響があるのかを見てみたい。

具体的に分析して見よう。

通訳者P: SLとの比較から分かるように、通訳者Pは、話し手が喋りだしてから第7秒のところまで、非常に順調に訳出していた。時間的には、殆ど、話し手との間、2秒の時間差を保っていた。SLは個別的な後置構造があったにもかかわらず、通訳者Pには情報の組み立て直しによる時間的なプレッシャーがかかかっていないようだ。問題は話し手の言い出しから第4秒の所に発生した。つまり、通訳者Pが聞き取れた情報を組み立て直した時に、話し手は11秒にも達している長い話を続けていた。この長い話をテキストに書き換えた後の構造は、このようになっている。“連用修飾語+目的語1+述語1+目的語2+後置副詞+目的語3+主要述語3”である。もし、この日本語文を正確に中国語に訳すなら、その構造は“主要述語動詞3+連用修飾語+述語1+目的語1+述語動詞2+目的語2”に変えなければなら



ない。明らかに分かることは、話し手の話を全部正確に理解し、訳出するならば、通訳者は発言の最後まで聞き終わらないと反応が出来ないことである。つまり、通訳者は 11 秒待たないと発言者の意味を理解できないのである。しかし、実際の仕事の中では、通訳者は 11 秒も待つことが不可能のため、通訳者 P は第 6 秒のところで、つまり、SL の目的語 1 が出てから、訳しはじめたわけで、述語動詞 1 を聞き取った後、中国語の“述語動詞+目的語”の構造要求を満たすために、第 10 秒のところで、やむを得ず、全ての内容を整理し始め、整理が終わるまで 2 秒もかかった。ここまでに、通訳者 P が使った時間は話し手が話を終わらせる時間よりわずか 3 秒速かっただけである。わずか 3 秒内に、残った内容、つまり“述語動詞 2+後置副詞(～ような)+目的語 3+主要述語動詞 3”の意味を全部理解して、訳出していくのは、普通の通訳者にとって基本的に不可能である。通訳者 P にとっても、例外ではない。

次に通訳者 D のことを見てみよう。

通訳者 D: 通訳者 D は訳し始めに 5 秒もかかった。5 秒で、話し手の話をよく聞き取って、理解してから、訳したわけである。このような心遣いにより、通訳者 D の第一文節の表現は非常に流暢でかつ正確であることが明らかに分かった。しかし、このような高品質の表現には代価も払った。それは、一つ目の文節を終わらせるまでに、通訳者 D が 11 秒もかかったことだ。その代わりに、話し手の話はこの 11 秒内で、全ての話を終わってしまった。そうすると、通訳者 D が一つ目の文節を表現すると同時に、11 秒の長さもある話し手の残った話を正しく処理しなければならない。上記の分析にもあったように、話し手の原発言の構造の複雑性と同時通訳の時間的なプレッシャーがあるからこそ、通訳者はこの 11 秒もある長い文を処理することにおいて、非常に混乱し。そして、通訳者 D 個人の想像によって、なるべく主題に近い内容を完全に聞き漏らした内容に代替することしか出来なかったわけである。

通訳者 A: この文の通訳レベルを比較してみれば、通訳者 A のレベルは通訳者 P よりやや高く、通訳 D よりだいぶ上手であることが分かる。勿論、通訳者個人の能力とその場でうまく発揮しているかどうかと関係があるが、これは小論の検討範囲内の問題ではない。しかし、TL のテキストの内容と SL 訳出の時間から見ると、通訳者 D も同様に時間のプレッシャーを感じていると見られる。同じ問題が話し手の 11 秒の発言内容を処理する時に発生した。つまり、通訳者 A がこの文を訳し始めた時間は話し手が喋りだした時間より 6 秒も遅れて、話し手が話しを終わらせようとする 5 秒内に、

通訳者 A が 11 秒の話をもとめてみると、このような結論を得る。SL 話し手の話が長すぎて、文の中の主要成分が文末に相次ぎ後置している場合、通訳者が、限られている時間内で纏まった話の内容を十分理解し、訳出することは非常に難しい。その結果、情報の漏れと誤りが発生し、通訳者が色んな方法で対応するのにも係らず、訳文の質に有る程度のマイナス影響を与えているわけである。

もう一つ別の図を用いて、このことを分析しよう。

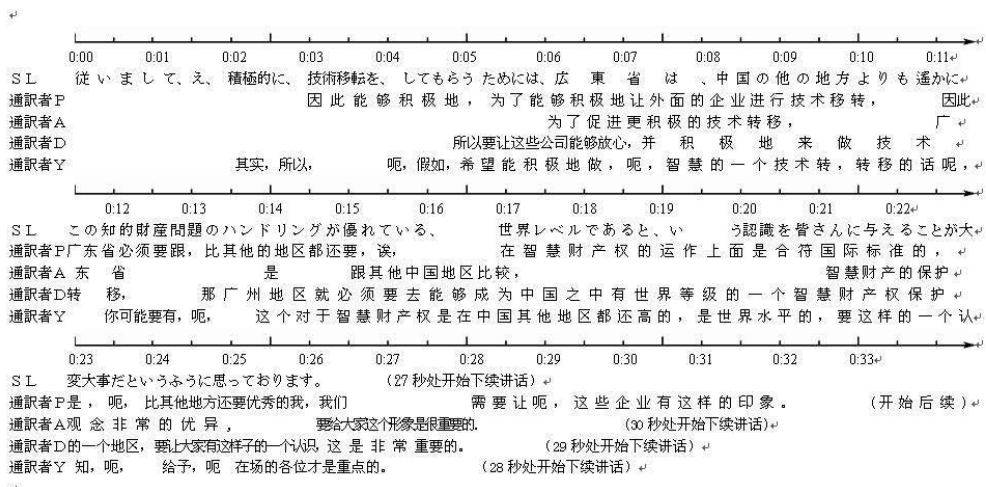


図 3 : SL2 に対する通訳者の通訳時間と質との比較図

上の図 3 を見てははっきり分かることは、SL 中の主要成分が後置しているため、全ての通訳者に影響をしていることである。全ての通訳者が非常に苦勞をして、最後まで辿り着いた様子が訳文を分析することで分かった。主な現象は、訳文が流暢でないこと。時間のプレッシャーがあったため、四名の通訳者は基本的に、発言者の一つ独立している文節が終わったとたんに訳し始めたが、しかし、SL の後置成分を処理する時に、通訳者は皆、意味を整理しながら、訳し終わった内容をもう一度組み立て直している。つまり、全ての通訳者が限られている時間内に、訳出しながら、理解し、理解しながら、意味を組み立て直していることを繰り返している状態にある。

#### 4. おわりに

以上の分析結果をまとめてみる。日中同時通訳は、SL 長文がよく出てくると同時に、

主要成分が往々に文末に来て、文の中で、連体修飾部と連用修飾部が複雑になっているため、通訳者が SL 文を理解するのは、大変時間がかかる。その一方、同時通訳は特別な時間の制限をかけられており、通訳者は限られた時間内に、ちゃんと文の最後まで聞き取って、理解し、訳出しなければならないことになるわけである。

日本語の文法構造の特徴と同時通訳の時間の制限性から見ると、日中同時通訳を研究する時、原発言理解の処理単位を語句単位に区切っていくことは、合理的なことだと考えられる。

今後、この小論の研究結果に基づき、日中同時通訳の質に影響を与える日本語の長難文の特徴を見つけ、それぞれの対応方法を考察していきたいと考えている。

【謝辞】：本研究は 2011 年度中国国家社会科学基金一般項目、課題番号 11BYY014、2014 年広東省人文社会科学基地広東外語外貿大学翻訳研究センター項目“日中同時通訳長難文の研究”、課題番号 CTS2014-10、2014 年度広東外語外貿大学省級高等教育教学改革項目“広東経済社会発展新戦略語境における日本語人材育成モデルの革新”、課題番号 GDJG20141099 によって、支えられていることを感謝して記す。

.....  
 龐焱(Pang Yan):1999 年同志社大学より修士(国文学)取得。2012 年広東外語外貿大学高級翻訳学院より文学博士号取得。広東外語外貿大学東方言語文化学院日本語学部准教授。  
 研究分野：通訳研究及び教育法。

連絡先：〒510420 広東省広州市白雲区 白雲大道北 2 号 広東外語外貿大学東方言語文化学院日本語学部 houenzi.happy@163.com

#### 【注】

- 1 本コーパスの SL データは、ここ 10 年間筆者が担当した広東省内における重要な国際会議のリアル録音に基づいたものであり、例えば、2005 年～2010 年、広東省最高レベルの経済会議——広東省国際経済諮問会、2003 年～2010 年、広東兵庫経済年次会、2009 年日中環境保護会議など、経済、環境保護、観光など多分野にわたる国際会議を含めている。TL データは、台湾輔仁大学翻訳学研究所の同時通訳実験室で、四名の新進通訳者が SL スピーチを同時通訳し、録音された内容に基づいたものである。この四名の通訳者が 2010 年 6 月に、輔仁大学の通訳資格試験を受けて、合格した新進通訳者である。データは全て Excel 機能によって、検索、分析することが可能となっている。日本語の SL は約 10 万字数で、中国語の TL は約 36 万字数である。また、SL である日本語の文は全部で 1018、TL である中国語の文は 4275 である。
- 2 SL は SOURCE LANGUAGE の略で、ソース・ランゲージのことを指す。
- 3 TL は TARGET LANGUAGE の略で、ターゲット・ランゲージのことを指す。
- 4 研究のために、小論が使用しているデータはすべてこのコーパスの中から抽出したもの

のである。

- 5 ③の文末の「……」は、話し手の主観態度を表す述語動詞“我建议”“(～と思う)”が省略されていることを補足、表現している。
- 6 通訳者の名前の頭ピンインを使用し、通訳者の実名を代替している表示である。
- 7 このPはPAUSEの略で、数字はPAUSEした時間を秒を単位として表している

#### 【参考文献】

- Jääskeläinen, R. (1993). Investigating translation strategies. In Tirkkonen-Condit, S. (Ed.). *Recent Trends in Empirical Translation Research*. Joensuu: University of Joensuu Faculty of Arts. 99-120.
- Lörscher, W. (1993). Translation process analysis. In Gambier, Y. & Tömmola, J. (Eds.). *Translation and Knowledge*. Turku: University of Turku. 195-212.
- Gerloff, P. (1986). Second language learners' reports on the interpretive process. In House, J. & Blum-Kulka, S. (Eds.). *Interlingual and Intercultural communication*. Tübingen: Gunter Narr, 243-262.
- Seguinot, C. (1996). Some thoughts about think-aloud protocols. *Target*, 8(1): 75-95.
- Seleskovitch, D. (1978), *Interpreting for International Conferences*. Washington: Pen & Booth.
- Gile, D. (2002). Training and research in conference interpreting: complementarity and tension. *Conference Interpreting and Translation*. 4 (1): 7-24
- 今富正巳 (1982) 『新訂中国語—日本語翻訳の要領』 光生館
- 大野晋 (1978) 『日本語の文法を考える』 岩波新書
- 小野貴博・遠山仁美・松原茂樹(2007) 「大規模音声コーパスを用いた日英・英日同時通訳における訳出遅延の比較分析」『通訳研究』第7号：51－64. 日本通訳翻訳学会
- 金田一春彦 (1988) 『日本語』 新版 (下) 岩波新書
- 神崎多賓子・待場裕子 (1997) 『逐次通訳から同時通訳まで中国語通訳トレーニング講座』 東方書店
- 龐焱 (2013) 『日中同声传译长难句及应对策略』 武汉大学出版社